

西園寺・鹿苑寺金閣に見る風景

神山 藍¹・出村 嘉史²・川崎 雅史³・樋口 忠彦⁴

¹正会員 農修 京都大学大学院工学研究科 (〒606-8501 京都市左京区吉田本町, E-mail: rkamiyam@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

²正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒606-8501 京都市左京区吉田本町, E-mail: demu@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

³正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒606-8501 京都市左京区吉田本町, E-mail: kawa@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

⁴正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒606-8501 京都市左京区吉田本町, E-mail: higuchi@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

京都には、多種多様な風景がある。ひとつの寺院を見るだけでも実に多様な風景がある。これは一概に地勢や自然環境に恵まれていただけではなく、長い歴史の中で蓄積されてきた風景に対する関心であるとも言える。本研究ではその事例として鹿苑寺金閣寺を対象に風景の展開を示すものとする。

キーワード: 風景、眺望、庭園、衣笠山、金閣寺

1. はじめに

(1) 本研究の目的と位置付け

本研究は段階を経て形成されてきた風景を時間軸に沿って整理し、その過程における環境のなかで獲得された視点場とその風景を明らかにする。筆者らは以前に、京都の伝統的な室内において、風景の多様な捉え方を明らかにしてきた。ところが、風景を捉えるための多様な工夫は、当然のことながら室内だけに留まらず、山荘などの広い敷地においても同様に発達してきた文化であると思われる。こうした風景は同一の場所においても歴史とともに移り変わるものと考えられる。本研究ではそのような風景の移り変わりに着目し、代表的な視点場の変遷を追うことによって、現在までにひとつの場所において獲得され、積み重ねられてきた風景観を明らかにするものである。

2. 風景の発展と継続

(1) 北山の歴史的背景

現在の鹿苑寺金閣寺周辺の土地は、1048年頃に仲資王の領地であった頃は、寺院建立、狩猟などに適した土地であったとされ、「もとは田畑などおほくて、ひたふ

るにみ、こふかく、池の心ゆたかに」¹⁾とあり、田や畠などが広がり、水が豊富な土地であった様子がわかる。しかし、1220年頃、所有主の神紙官伯家より西園寺公経の手に移り、西園寺が築かれました。その後、1398年に荒廃していた西園寺家の西園寺を譲り受けた義満が、ここに山荘北山殿の造営するという流れが見られる。

(2) 西園寺の頃

西園寺は「公経のおほきおとと、其かみ夢みたまへることありて、源氏の中将わらはやみまなしひ給ひし、北山のほとりに、世にしらすゆゆしき御堂を建てて」²⁾とあり、源氏物語の若紫の風景に準えた場所に御堂を建てたとある。西園寺とこの源氏物語に書かれている風景を比較してみると、北山にあり、高台の見晴らしの良い場所、崖があること、浅い山、瀧があることなど多くの類似点が挙げられる。つまり、理想的な風景観があり、それに基づく場所に別業が営まれたことがわかる。

増鏡には、この西園寺の山荘について「これは猶、やまのけしきさへおもしろく、宮こはなれて眺望そひたれは、いはむかたなく、めてたし、」³⁾と記されている。このことからわかるように、山々に囲繞された地でありながら、山々の景色に富んでいて、都を見渡せる景色が賛美されている(図-1)。

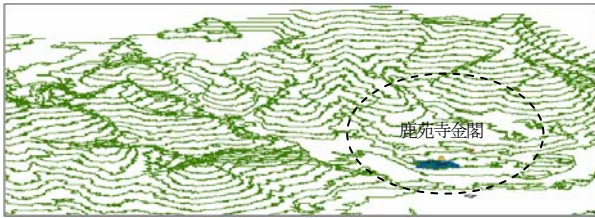


図-1 鹿苑寺金閣寺周辺の地形

西園寺の伽藍配置などに関する資料はほとんど残っていないが、1224年(元仁元年)に藤原定家が西園寺訪問した際に、「泉石の清澄は、まことに比類なし⁴⁾」と激賞していることなどから、水が豊富で、壮大なスケールの瀧があったことが記されている。現在でも、西園寺の遺構とされる安民沢と呼ばれる池が領地の高台にあり、高低差を利用した水の使われ方があった可能性は高い。このように西園寺は自然な地勢と水の豊かさを兼ね備えた山荘であり、眺望が豊かな正に理想的な山荘であったことが読み取れる。

(3) 西園寺から鹿苑寺へ

その後、荒廃していた西園寺家の西園寺・北山第を譲り受けた足利義満がこの北山第を北山殿として創建するが、西園寺の面影を一部そのまま利用するという形態をとったとされている。これは、西園寺の伽藍がその風景に適い、構成美を保っていたと言える。そして、義満は舍利殿・天鏡閣を新たに加えた。この増設された舍利殿と天鏡閣によって北山殿はその存在を一層有名なものにした。現在は陸続きの舍利殿は当時は閣の周囲に水をめぐらし、舍利殿と北に位置していたと思われる天鏡閣との間に亭橋を架けて、供北楼と構っていたとされている。西園寺時代から続くその豊かな地勢と伽藍配置に加えて、新しい異風な建築物をその環境に馴染ませたことがこの北山殿の功績であると言える。そして、この風雅な自然景に相応した三層閣からの景色が現れた。

(4) 舍利殿からの風景

舍利殿(金閣)は鏡湖池のほとりに建つ三層閣であり、池に臨んだ庭園建築として名高い。その外装は二層と三層は金箔を扱った意匠である



図-2 舍利殿の外観の様子

が、一層部分は装飾がなく、上部には縁だけで屋根がないため軽快で、上品さが備わっていると言える(図-2)。

a) 一層「法水院」

舍利殿の一層は「法水院」と呼ばれ、正面広縁は四本しか柱がなく、吹き放しとなっている。広縁奥の間、柱六本に対して前は三間の四本とし開放的な空間を作り出し、柱も15cmと細く優美な建築意匠を意識すると共に前方に広がる鏡容池の景色を取り込もうとしている意図がみえる。

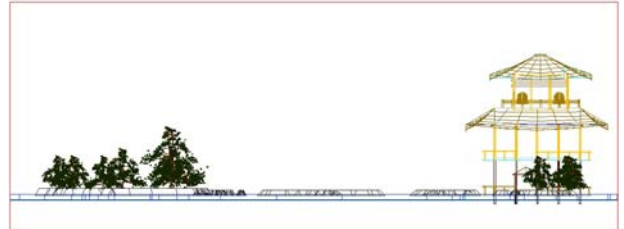


図-3 舍利殿と中島の位置関係

舍利殿の前方に葦原島とよばれる中島が建物と平行する形で横たわっている(図-3)。従って、一層からはこの中島と鏡湖池の風景を主体として広がる空間が楽しめる(図-4)。

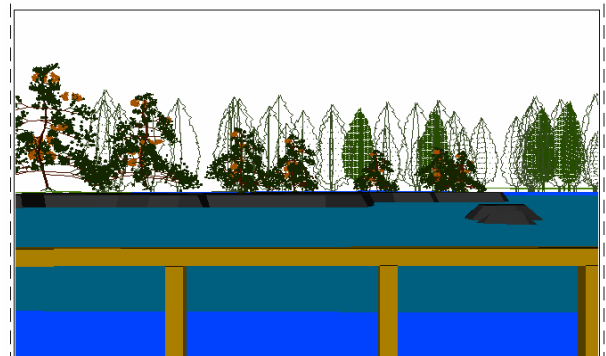


図-4 一層からの景色 (CG再現)

b) 二層「潮音洞」

二層からの眺望は池を俯瞰する形で、金閣の前にある鏡湖池を中心とし、葦原島など大小の島々を一望できる。敷地内の小空間を眺望するには最も良い俯瞰景が楽しめる(図-5)。

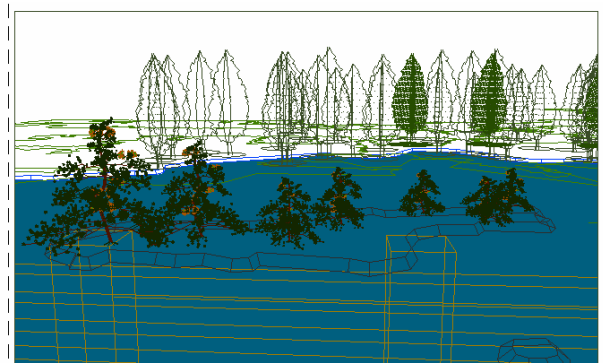


図-5 二層からの景色 (CG再現)

c) 三層「究竟頂」

花頭窓や棧唐戸、組物やまわりの高欄など禅宗の建築形態を兼ね備えている。八代将軍義政がこの地を訪れ、金閣に登った際に、

四面皆山、
楓葉如錦也、
不減西芳寺風景⁵⁾

と四方が山々に囲まれ、楓の葉が錦のようであり、西芳寺の風景にも劣らずと明記している。このことからわかるように、三層からの眺望は近傍の山々の表情を取り入れた風景であり、自分の敷地を俯瞰し、遠望の山々ですら見渡すことができる。特に、西方に見える衣笠山を高い位置から見ることでその衣笠山を特徴付ける美しい曲線美を眺望することができる（図-6）。

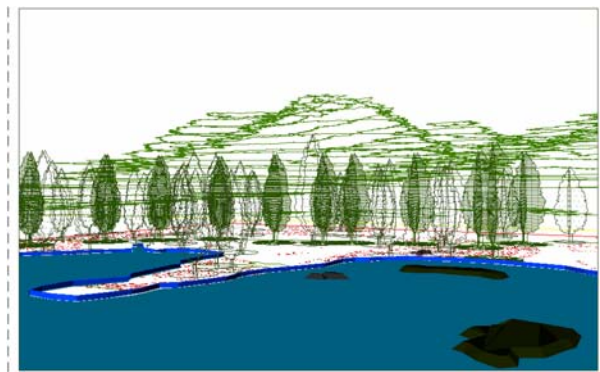


図-6 三層からの景色（CG再現）

このように、異なる層を設けることによって、視点の違った風景を創造し、多様な景色を楽しんでいたと考察できる。

(5) 都名所図会から見るの金閣寺

都名所図会などの絵図から描かれている風景は金閣とそれを取り巻く鏡容池と西南方向に見える衣笠山を主体としている（図-7）。足利治乱記には「衣笠山の名に逢ふ景色なり」⁶⁾とあり、衣笠山が風景の主体の一つとして取り上げられていることが把握できる。そして衣笠山との調和を持って風景が成立していることが理解できる。



図-7 金閣寺庭園⁷⁾（都名所図会より）

江戸時代に入り、鹿苑寺の境内に金森宗和好みとされる茶席が設けられる（図-8）。



図-8 金閣と夕佳亭（都林泉名勝図会）⁸⁾

夕佳亭の名は陶淵明の詩から名づけられ、
悠然見南山 悠然として南山を見る
山氣日夕佳 山氣 日夕に佳く⁹⁾

と、夕日に映える金閣が殊にによい景色が望める茶席と伝えられている。

衣笠山は夕佳亭の南西の方角に位置し、高台にあることから、金閣を俯瞰でき、その背後に衣笠山を見ることができる（図-9）。

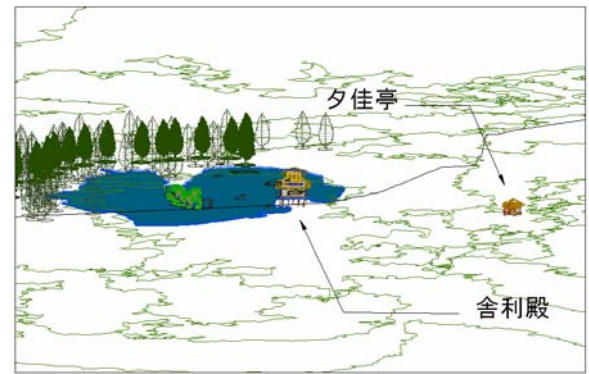


図-9 舍利殿と夕佳亭の位置関係

更に、鳳棲楼と呼ばれる二畳敷の間があり、茶室とは別に西方向斜めに一段高く舞台造りの掛け出し風のつくりになっている。この室は三方を肘掛窓にしてあり金閣および衣笠山へ向かって開放された造りになっている（図-10・11）。

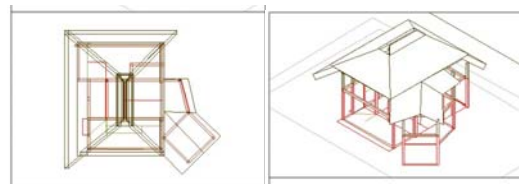


図-10 夕佳亭立面・平面図

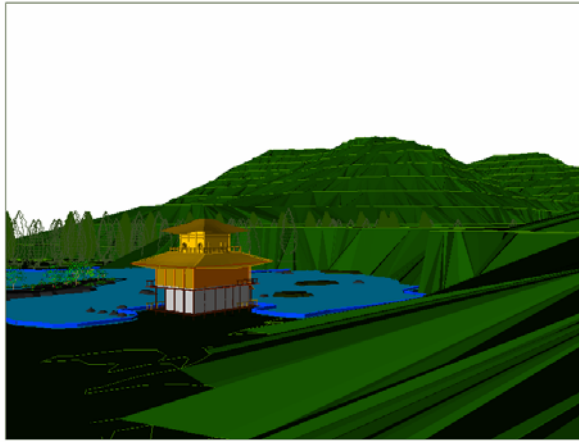


図-11 夕佳亭からの景色 (CG再現)

- 7) 秋里籬島編 竹原(春朝齋)信繁画：都名所圖會京都叢書刊行会，1916
- 8) 秋里籬島撰 佐久間草偃ほか画：都林泉名勝圖會(覆刻版)，名著普及會，1975
- 9) 陶淵明[著] (鈴木虎雄訳注陶淵明詩解 /小川環樹解題)：陶淵明詩解，平凡社，1991

3. まとめと考察

以上により、圍繞性と開放性のある視点場、瀧を仰観する視点場、池泉に取り囲まれた視点場、その池泉や中島を俯瞰する視点場、周辺の山や嶺を遠望する視点場、建造物と衣笠山を眺望する視点場といったように新たな視点場を加えながら、性格の違う風景が時代を通して重層化されてきたことがわかる。

こうして風景の成立過程を見てみると、現在見られる風景は、個人の景色として見られていたと言うよりは、多くの人々が風景を共有し、支持してきたことがわかる。新たな風景要素を取り入れる際でも同様に、周りとの調和を意識し、新たな調和が生み出され、その場所に合った風景を蓄積させてきたことが注目すべき事実である。

このようにひとつの寺院を見るだけでも実に多様な風景が存在する。これは一概にこの地が地勢に恵まれていただけではなく、景色を効果的に取り込む創意があったからであると言える。つまり、先人が自然に備わる潜在資源を巧みに引き出してきたことに帰依する。そして、このような演出的発想が発展した結果として、豊かな空間が継続されたと考えることができる。

謝辞：本研究のCG作成において、国際航業株式会社の吉岡邦夫氏には京都地形データを提供くださるなど多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表す。

参考文献

- 1) 井上宗雄 (訳注)：増鏡，内野の雪，講談社，1979-1983
- 2) 紫式部著 (与謝野晶子訳)：源氏物語，河出書房，1967
- 3) 増鏡
- 4) 藤原定家著 辻彦三郎校訂：名月記，続群書類従完成会，1971
- 5) 眞蘂著 (玉村竹二，勝野隆信原校訂編集)：蔭涼軒日録，臨川書店，1978
- 6) 黒川真道編：室町殿物語 (足利治亂記)，國史研究會，1914